

令和 4 年 6 月 6 日現在

機関番号：32612

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2021

課題番号：19K23019

研究課題名（和文）模本および画人伝資料の調査を通じた江戸時代後期の室町水墨画の受容

研究課題名（英文）A Study on the Reception of Muromachi Period ink paintings in the Late Edo Period through a Survey of Copies and Biographical Materials of Painters

研究代表者

松谷 芙美（Matsuya, Fumi）

慶應義塾大学・ミュージアム・commons（三田）・講師

研究者番号：30847760

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、菅原洞斎と狩野秀水を中心とした秋田藩絵師の模本調査と、その原本である室町水墨画の調査を通して、模写者の特徴や傾向について考察をおこなった。あわせて、洞斎が編纂した画人伝と模写の関係性を考察し、彼らの思考の拠り所や、その活動を紐解いた。総体的な分析として、藩絵師の模写資料全体を、原本作者によって分類し、その割合を算出し、工房内の模写の傾向と、洞斎と秀水の模写の傾向を比較した。個別的な考察として、他藩と交渉し、所蔵の古画を借用閲覧している事実をいくつか確認した。そのような事例を汲み取ることによって、洞斎が、『絵師姓名冠字類抄』を編纂する過程を辿った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

江戸時代後期の識者の、室町水墨画への関わりを通して、彼らの活動を紐解く、受容史研究であると同時に、その源流にある室町水墨画研究に資することを旨とした研究であった。研究当初、秋田藩絵師の菅原洞斎や狩野秀水は、美術史学では研究対象とされてこなかったが、近年、江戸時代後期の狩野派や、模写資料への再評価の動きがある。2022年4月の狩野秀水家資料の公開に引き続き、本研究は、美術史学の分野から、菅原洞斎の活動を紐解く初の試みとなった。また、本研究を通して、雪村研究における『説門弟資云』の問題に対する、ひとつの提議を見出すことができたことは、洞斎らの活動の再評価につながるだろう。

研究成果の概要（英文）：This study examined the characteristics and tendencies of the copyists through a survey of copies of paintings by painters of the Akita clan, mainly Sugawara Dosai and Kano Shusui, and a survey of the original Muromachi period ink paintings. In addition, the relationship between the biography of the painters compiled by Dosai, and their copies was examined, and the basis of their thinking and their activities was unravelled. As a general analysis, the overall material copied by clan painters was classified according to the original author and the percentage of the material copied was calculated. Trends in reproductions within the workshop were compared with those of Dosai and Shusui. As an individual analysis, I was able to confirm the fact that he negotiated with other clans and borrowed and browsed old paintings in their collections. By drawing on these cases, the process by which Dosai compiled the biography of the painters became clear.

研究分野：日本絵画史

キーワード：室町水墨画 雪舟等楊 雪村周継 賢江祥啓 受容史 画人伝 菅原洞斎 狩野秀水

1. 研究開始当初の背景

本研究を開始した背景には、これまで筆者が継続してきた雪村研究の上で、ひとつの謎であった『説門弟資云』の問題があった。壮年期の雪村が天文11年に、弟子に宛て書いた『説門弟資云』は、短いながら日本最初の本格的な画論であって、その簡潔で論理的な主張内容は、同時代の水準を超えていることから、林進氏、小川知二氏らが疑問を呈し、さらに成瀬不二雄氏の論考が発表され、現在は偽書ということで決着をみている(注1)。

近代に初めて、本画論を取り上げ、紹介したのは、雪村について初めて美術史的な研究を試みた福井利吉郎氏である。福井氏は、本画論が、雪村作品への深い理解と巧みな論法によって、その特色を簡潔に物語っていること、江戸時代後期の識者に紹介されていることから、その信憑性を主張された。その後、その提言は広く受容され、雪村研究において看過できない史料となった。現在、偽書と結論づけられている本画論であるが、このような書を、江戸時代後期の識者らが取り上げた事実があること、その識者に、知名度の高い谷文晁や酒井抱一らが含まれることから、単なる偽書と片付けて良いか、研究者間でも戸惑いがあるように感じる(注2)。本研究はこの戸惑いから端を発している。我々は、現在まで蓄積された先行研究を抛り所に、室町水墨画を捉えているが、谷文晁、酒井抱一、菅原洞斎ら、江戸時代の識者たちは、どのような資料を見て、古画を判断していたのか。雪村の画論『説門弟資云』にまつわる戸惑いを解消するには、江戸時代の識者の活動、研究環境や思考の抛り所を明らかにする必要がある。

注1:

・林進「雪村とその作品」『特別展 雪村 戦国乱世を生きた大画人』図録、大和文華館、1981年、4-9頁。

・小川知二「雪村の画論『説門弟資云』について」『東京学芸大学紀要 第2部門 人文科学』55巻、東京学芸大学発行、2004年2月、391-407頁。

・成瀬不二雄「雪村の画論『説門弟資云』についての疑い」『美術史論集』1号、神戸大学美術史研究会発行、2001年2月、1-13頁。

注2: 小川知二「谷文晁、酒井抱一、菅原洞斎の雪村崇拜-雪村の画論『説門弟資云』の謎をめぐる-」『雪村-奇想の誕生』展覧会図録、東京藝術大学大学美術館・読売新聞社編集、読売新聞社発行、2017年、190-191頁。

2. 研究の目的

本研究は、江戸時代後期の識者の、室町水墨画への関わりを通して、彼らの活動を紐解く、受容史研究であると同時に、その源流にある室町水墨画研究に資することを目的としている。

主に、本研究では、菅原洞斎およびその弟である狩野秀水門下の模本調査を中心に行い、模本の制作状況、模写の特徴、画題に関する情報を集積し、分析することで、室町時代水墨画の受容の状況を客観的に捉えること、さらに、その過程で、彼らの活動を紐解くことを目指した。模写者が同じ秋田藩絵師であっても、立場、目的、状況によって、あるいは個性や技術によって、その描写方法や、何を描き止めるかに差異や特色がある。本研究は、これまで美術史学の先行研究では取り上げられてこなかった秋田藩絵師らそれぞれの個性にも目を配りつつ、同時に、固有の事情に留まらず、室町時代の水墨画に対する評価を、藩絵師の活動から捉えることを目指した。

3. 研究の方法

研究方法は、主に以下の3つである。文中の(1)～(3)は以下の3つの研究方法を指す。

(1) 秋田藩絵師らの模本調査

千秋文庫、東京国立博物館、京都国立博物館、早稲田大学會津八一記念博物館のご協力をいただき、調査をさせていただいた。まず、千秋文庫では、全コレクションのうち、菅原洞斎、狩野秀水による模本の目録を提供いただき、そこから一部を現物調査した。現物の調査からは、書き込みの情報、描写の方法、彩色の施し方などを確認した。また、現物調査をしなかった模本については、目録と調査記録写真を閲覧させていただき、佐竹藩が保管していた模本の総体を把握するとともに、菅原洞斎、狩野秀水を中心として、(3)の受容分析のために必要な情報を集積した。また、京都国立博物館では、狩野常信筆模本「雪舟筆 鎮田滝図」を現物調査させていただき、千秋文庫所蔵の狩野秀水筆模本と描写の方法を比較した。東京国立博物館では、伝来は明らかではないが、木挽町狩野家の模本と推測される雪村周継作品の模本を、数件閲覧した。本調査は、(2)の模本の典拠となる作品の調査を合わせることで、雪村周継研究にも重要な模本を見出すことができた(注3)。最後に、早稲田大学會津八一記念博物館に寄託されている狩野秀水家資料については、展覧会「お殿様と狩野派 佐竹藩主佐竹家と藩絵師狩野秀水家」および、目録と調査記録写真を通して資料の総体を把握するとともに、(3)の分析のための情報を集積した。展覧会終了後に模本の現物調査をさせていただき予定となっている。

(2) 模本の典拠となる作品の調査

京都国立博物館、白鶴美術館、正宗寺(茨城県)から特別にご協力をいただいた。雪舟等楊筆「天橋立図」(京都国立博物館所蔵)、雪村周継「滝見観音図」(正宗寺所蔵)の現物調査のほか、賢江祥啓筆「瀟湘八景図」(白鶴美術館所蔵)の高画質写真や、各地で開催される展覧会での閲覧なども併せて行い、研究を進めた。(1)(2)の調査については、新型コロナウイルス感染対策の対応が求められるなか、現物の調査や画像の提供、目録、調査写真等の内部資料の閲覧を、ご快諾いただいた施設の方々に、この場を借りて心から感謝申し上げます。

(3) 原典となる室町水墨画の江戸時代後期における受容の分析

秋田藩絵師の模本総体から、漢画の割合を集計した。また、室町水墨画について、(1)で得た模本調査情報を元に、所蔵や借用状況、模写者の目的、模写者間の差異を分析した。本作業により、江戸時代後期と現代の室町水墨画の内容に隔離があるのか、洞斎ら往時の識者の思考の拠り所を明示するとともに、古画の受容について考察した。

注3: 松谷英美「雪村周継の生涯と作品(四) 晩年～没後」『慶應義塾大学アート・センター年報/研究紀要 28(2020/2021)』慶應義塾大学アート・センター編集発行、2021年8月、107-115頁。

4. 研究成果

本研究は、菅原洞斎ら江戸時代の識者の思考の拠り所を探るため、秋田藩絵師の模本を調査し、情報を集積した。その過程で、経歴が判明する菅原洞斎、狩野秀水に加えて、経歴が不明とされる狩野洞眠、菅原虎三らが描いた模写を数多く目にした。当初、模本からは、個人の評価が難しいと感じていたが、数が集まると、そこに模写者の個性のようなものが立ち現れてくるように思う。模本は数が多いため、本研究では室町水墨画を切り口として、成果をまとめた。

まず、狩野秀水家資料から模写の傾向を分析した。狩野秀水家資料一覧(注4)には、下絵や作

品も含み、模本か否かの判断が厳密には困難であるため、何らかの原図作者が明らかな模本約200件を集計した。秀水に限らず、その門下の模本も含むため、個人の趣向の差異ではなく、藩絵師として、藩主の依頼や、創作のために、どのような模本が必要とされたのかが見えてくる。結果としては、狩野派が圧倒的に多く59%、中国絵画が16%、室町水墨画が9%であった(図1)。なお、狩野派の絵師が模写した中国絵画の模写は、中国絵画に入れたため、圧倒的に狩野派の作品の模写が多いことが分かった。

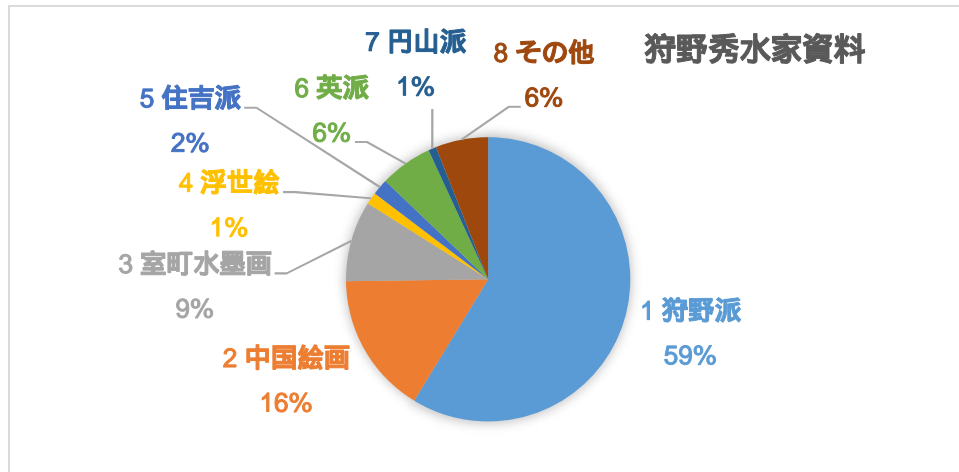


図1

続いて、千秋文庫所蔵資料は、藩絵師が藩に提出した模本と考えて差し支えないだろう。調査で得た情報から、洞斎と秀水が模写あるいは関与した模本を集計することで、個人の傾向を捉えた。洞斎が模写した模本56件のうち、54%が中国絵画、35%が室町水墨画で、両者をあわせると、約90%を占めた(図2)。狩野探幽等の狩野派の模写はわずか5%である。一方、狩野秀水が模写(あるいは関与)した模本は32件であるが、中国絵画は15%、室町水墨画は44%で、あわせると60%である(図3)。他には、狩野派が15%、原作者不詳の作品も多くあった。私が得た目録に限れば、洞斎が原作者不詳の作品を模写しているケースは、画人不明の明代絵画と探幽が模写した作品(集計では狩野派に加えた)の2件であった。両者の間で、模写に対する立場の違い、趣向の差異が見えてくる。

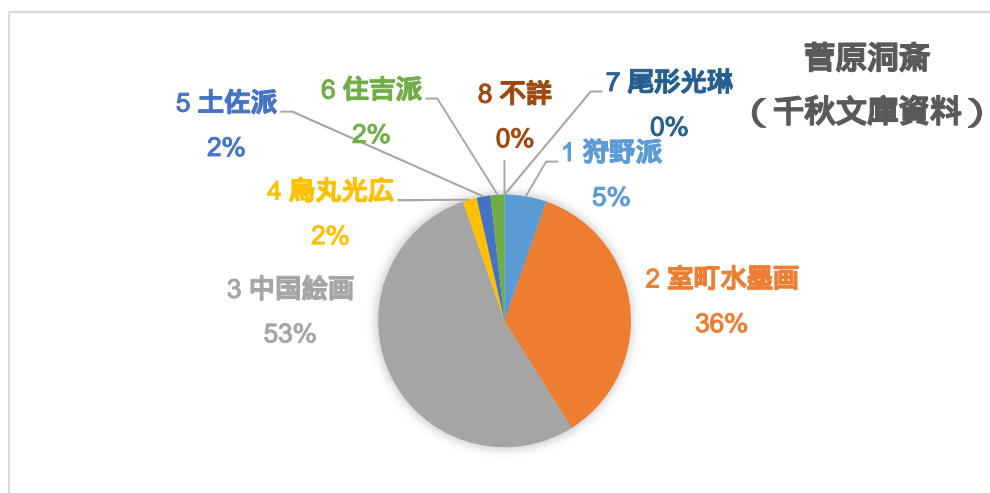


図2

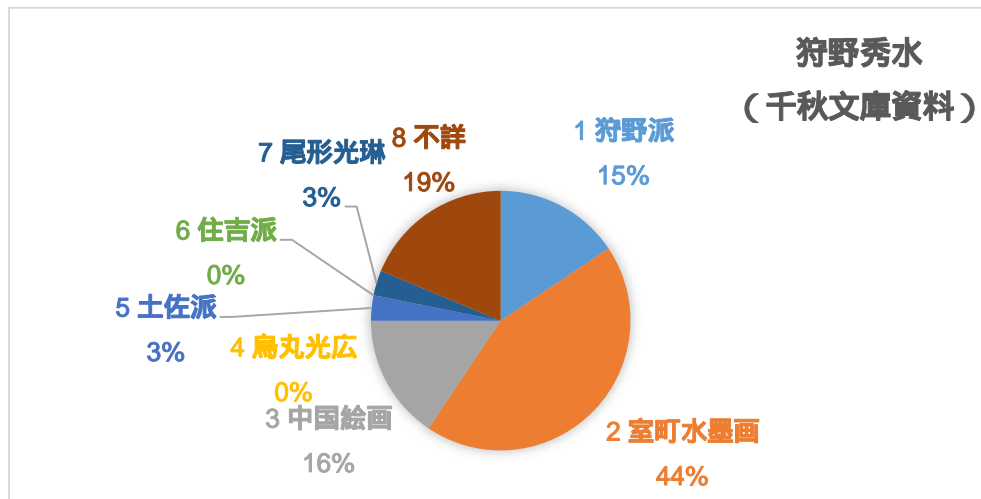


図 3

二つの資料群から判明するのは、大名家へ提出した模本は古典絵画が中心である一方、狩野派の工房内では、創作にあたって、狩野派一門の模本を模写していることである。学習の上でも一門に保管された模本が繰り返し用いられていたという結果が明確になった。古典学習としては、中国絵画と室町水墨画の模写の割合が高く、漢画学習を重視している。一方で、琳派や円山派、英派や浮世絵まで幅広い流派の画題を模写し、それを描き分けていることも特筆される。

個人の傾向を比較すれば、秀水と比べ、洞斎は非常に偏った結果が現れた。洞斎は、さまざまな様式の古画の模本を作成するよりも、中国絵画と室町水墨画の模本作成に非常な関心を寄せていたと考えられる。その関心は、絵師のそれよりも現在でいうところの鑑定家、研究者のものに近い。例えば、洞斎は、『画師姓名冠字類抄』(国立国会図書館所蔵)の著者として知られるが、本書は広く画師の情報を編纂したものであり、個別の関心をあぶり出すのはやや難しい。たとえば、本書の雪村周継の項目に『説門弟資云』が掲出されるが、その発見談は記載されない。一方、観嵩月著『画師冠字類考』(岩瀬文庫所蔵)には、洞斎からの聞き書きの記述が多数あり、発見談に加えて、洞斎による雪村考が記されることが判明した(注5)。この書によれば、洞斎は、先行文献を挙げつつ、その問題点を指摘し、現実的な雪村の生年を推定しており、その態度は、現在の美術史研究者の手法と同じであることが分かった。この洞斎の思考は、所蔵者のもとへ通い、あるいは作品を借り受け、模写を行い、そこから得た客観的な情報を蓄積し、『画師姓名冠字類抄』を編纂した態度にも現れている。このような洞斎が、根拠もなく偽書に加担することは考えにくいのではないかというのが、現在の筆者の見解である。同時に、雪村についてなみなみならぬ関心を寄せていることも、改めて明らかになった。

本研究の過程で、室町水墨画について、その伝来や、現存作品と隔離した画題の傾向など、今後考察すべきことが浮き彫りになった。室町水墨画研究に、本研究成果を反映させるべく、引き続き、調査を継続したい。

注4:「お殿様と狩野派 秋田藩主佐竹氏と藩絵師狩野秀水家」図録、山田麻里亜・柏崎諒編集執筆、早稲田大学會津八一記念館発行、2022年、53-67頁。

注5:前掲注3。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 松谷 芙美	4. 巻 28
2. 論文標題 「雪村周継の生涯と作品（四）晩年－没後」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『慶應義塾大学アート・センター年報 / 研究紀要28 2020/21』	6. 最初と最後の頁 107－115
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Fumi Matsuya
2. 発表標題 Poster session 「Treasures from the Century Cultural Foundation: University Collection, Exhibition, and Cross-disciplinary Research」
3. 学会等名 UMAC Tokyo Seminar 2019 : University Museums as Cultural Commons - Interdisciplinary Research and Education in Museums (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------